

抜粋版



バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No:13

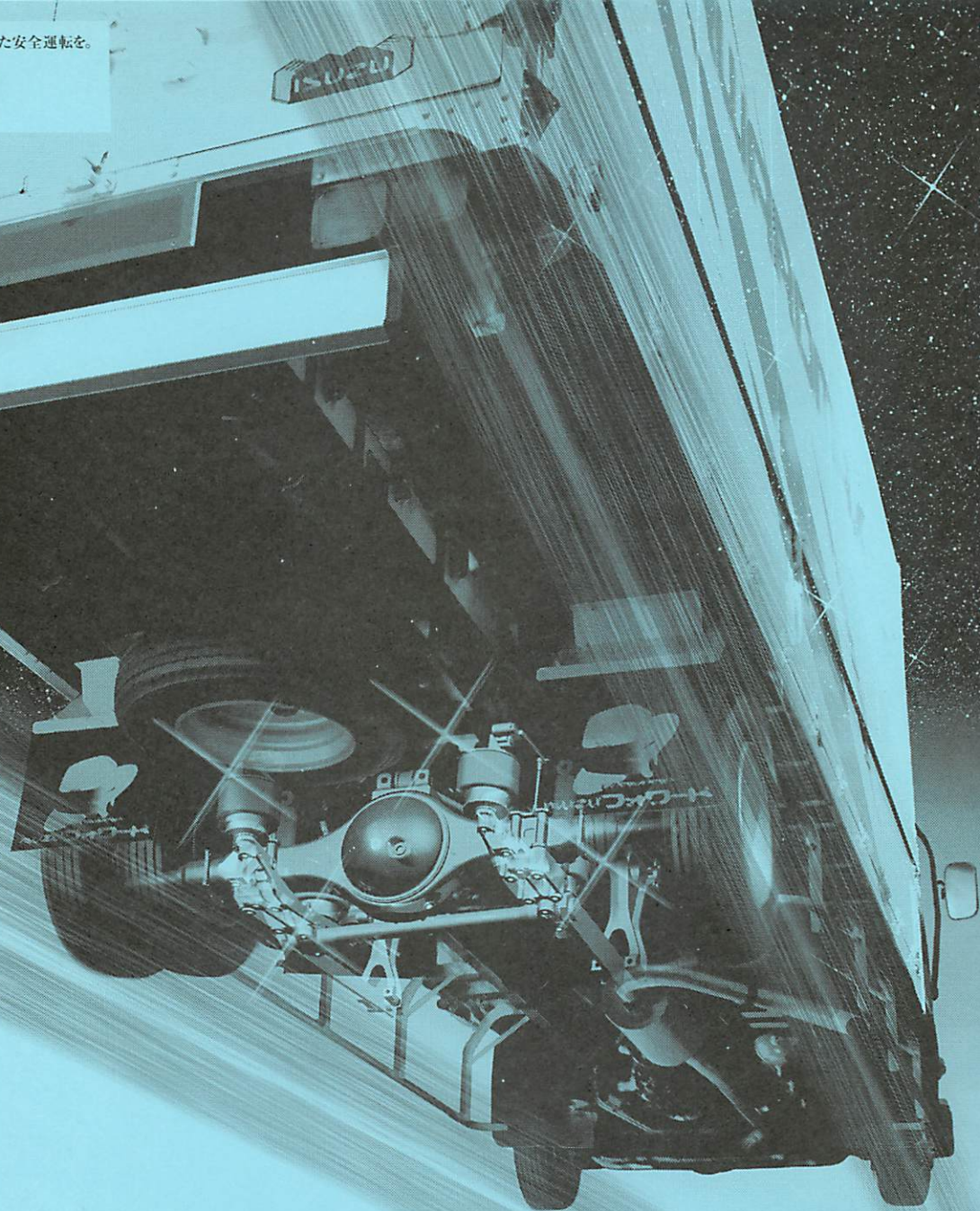
2000年12月

日本バスケットボール振興会

シートベルトをしめ、スピードを控えた安全運転を。

ISUZU
THE POWER OF IT ALL

これが経済効率の最先端。



誕生!



FORWARDMAX

GIGAMAX

GIGATRACKTOR



21世紀へ、最先端の経済効率をご提案します。

輸送に携わる皆さまから絶大な信頼をよせられる、いすゞ4バグエアサスペンション・シリーズ。荷崩れ・荷傷みの低減と抜群の経済性で、時代のニーズにお応えします。大型トラック・ギガマックス、ギガ・トラクタ、そして中型クラスにフォワードマックスをラインナップ。4バグエアサスペンションのいすゞが、最先端の経済効率で、皆さまのお仕事を力強くバックアップします。

ISUZU **4** バグエアサスペンション・シリーズ

●お問い合わせは最寄りの販売会社またはいすゞ自動車株式会社お客様相談室へ。お客様相談室（フリーダイヤル 0120-119-113 / 03-5471-1188）●インターネットからISUZUの情報が取れます。BELLCOM <http://www.isuzu.co.jp/cv>

目 次

○ 理事会および役員会・パーティ報告（概要）	1
平成12年度 春季理事会・役員会	
平成12年度 秋季理事会	
平成12年度 秋季役員会・懇談パーティー	
○ 前全日本男女両監督を招く……感謝と慰労の会を開催	16
小浜（男子）・中川（女子）両監督挨拶	
○ 観戦記	
ヤングメン VS 中国	寺田 生男・22
スーパー2000（第1・2戦）	坂本 博・23
（第3戦）	早川 忠雄・26
JBLプレスーパーリーグ	小澤 正博・28
○ 特集「家庭婦人バスケットボール」	普及懇談会・29
付. 全国家庭婦人バスケットボール大会に参加して	高岡 治子・35
○ 風神雷神 . . . 《日本のバスケットに期待する》	池田 博・39
○ わが軌跡 . . . 《バスケットとの出会いと歩み》	井上 一男・40
	関根 正司・41
	澤田 嘉夫・42
	渡部 嘉子・43
○ 会員だより	44
	今泉 正一 関口 莊次 野口 昌三
	深尾 秀次 小泉 明子
○ 特別寄稿 「オリンピックのメダルに思う」	坂本 博・47
○ 計 報 畑 龍雄氏 . . . 森澤 誠一 瀬古 孝男	48
田口栄太郎氏	
鈴木源吉郎氏	
山縣 敏夫氏	
○ 常任理事会報告（概要）	51
○ 事務局便り	55
○ その他 各団体スケジュール	56

前全日本男女両監督を招く



—感謝と慰労の会を開催—



編集広報懇談会

当振興会内部では、長年にわたり全日本チームの指導強化に尽力された監督の方々に対し、振興会として是非何らかの形で慰労かたがた謝意を表したいという声が頻りでしたが、漸く具体化の運びとなり、小浜（男子）、中川（女子）両氏をお招きして感謝と慰労の意をこめた“両監督を囲む会”を開催することができました。

去る6月13日、都内プレジデントホテルにおいて開かれた小宴では両氏を囲んで多数の会員が列席するなか、住田会長より両氏に対し丁重な謝辞が述べられるとともに、ささやかな記念品が贈呈され、その後なごやかな歓談のひとつきを過ごしました。

これまで、こうした主旨の行事は余り斯界に例を見なかったかと思われませんが、振興会の立場や果たすべき役割からすれば、誠に当を得た企画でありましたし、強化現場と後援団体との心の交流の面でも意義深いイベントでした。

なお、その節両氏からも交々ご挨拶がありましたので、それぞれの内容の要旨を以下に掲げさせていただきます。

※小浜元孝氏は、1979年から男子全日本スタッフに加わり、今年3月までに監督を勤められること4回、'98年の第13回世界選手権に8大会ぶりに出場した。（67歳 現いすゞ自動車監督）

※中川文一氏は、1985年から'88年まで全日本女子コーチ。90年から今年3月まで同監督を勤められ、'96年のアトランタ五輪に5年ぶりに出場し12ヶ国中7位と健闘。また、世界選手権にも3度の出場を果たす。（52歳 現シャンソン化粧品監督）

小浜元孝氏の挨拶（要旨）

私は20年の間に4回全日本の監督をやりましたが、それもだいたい半年任期でした。今でも忘れられませんが、鈴木先生に東京駅のステーションホテルのレストランで、“小浜それ以上はいうな、我慢しろ”、といわれたのに我慢できず、若気の至りで色々しゃべった揚げ句、第1回目まづ首になりました。2回目に出てこいといわれたのは、ここにおられる大塚さんが技術強化部長の時で、“小浜お前がやるしかないのだから口にチャックしてやれ”ということで、亡くなられた松下電器の遊津さん（専務理事）の前につれていかれ、“絶対に余計なことをいうなよ”といわれながら再度復帰しました。その時は1年半でしたけれど、中川君は10年間続けてきただけに非常に辛い思いをしているだろうなと思います。

女子の場合の強化は男子の場合と全く違って、高校から実業団へと非常にうまくいっていると思います。男子の場合ですと高校を出てから大学があって実業団に入ってくるわけです。私は戦後昭和23年からずっと日本のバスケットを見てきて、例えば25年にハワイの日系チームが来たときにワンハンドシュートを初めて見たのですが、次の大学リーグを見に行ったらワンハンドシュートがもうとり入れられており、ウオーレスより関口、八谷選手の方がうまかったものです。日本人は吸収力がものすごく早いんだなと思いました。僕らも高校2年まではボースハンドでした

が、3年からワンハンドシュートをやり始めました。そうした時代から日本のバスケットをずっと見てきまして、自分も何時かは指導者になりたいと思って、サラリーマンを辞めたのですが、たまたま当時日本協会でもコーチをアメリカに派遣しようということになりましたので、お世話を頂きました。僕は英語はしゃべれませんでした、関係ないから行けといわれたのです。とにかく先輩のいうことは聞こうとアメリカに行きました。

アメリカのケンタッキー大学は今でも一番強いといわれていますけれども、日本と比べバスケットをやる環境と組織が違い、これにはびっくりしましたし、練習を見てなおさら感心しました。こんな連中がこんな厳しい、合理的な練習をするのかと驚いた次第です。1年間チームにずっと帯同して、試合の前にはどうするか、試合から帰ってきたらどうするか、など全部見ましたが、日本のバスケットはまだ相当かかるなという感じでした。当時有名なUCLAのコーチだったジョンウッド氏が、今は引退されてミニバスケットのコーチをされていますが、この方とお会いしたときにいわれたことで今でも私のコーチとしての信条としていることばが一つあります。“コーチというのは選手に媚びることなく、お世辞など使わず、正しいバスケットを厳しく教えるのだ”ということです。そういわれて練習を見ていますと、なるほどなと思うことが随分ありました。それから帰国して、協会から“お前アメリカにせっかく勉強に行ったのだから全日本を見ろ”といわれた次第です。

それまでの私のコーチ経歴は女子の高校、男子の高校（母校）、それに女子の実業団、法政大学を少し見た程度でしたから、全日本の監督をやれといわれたときは本当に震える思いでした。現実にはアジア大会、オリンピック予選まで何日あるのかといえば半年しかない。その中でこの日本チームがあの中国にどうやったら勝てるのか、それはもう“戦う集団”を作るしかないなと思いました。バスケットボールは習慣のゲームだとよくいわれるのですが、いい習慣をつけるか、悪い習慣をつけるかしかなく、いい習慣をつけるためには相当厳しくコーチがチェックしなければなりませんし、自分も選手も強くなければいけないということです。そのように考えましたが、結局第1回目の監督の時には中国に延長戦で負けました。それまでは日本がオリンピックに行っているといっても、中国に20点から25点差で負けても出られたわけです。つまり中国がオリンピックに出られなかった時代だったからなのです。

次に、私はビートニューエル氏に“どうして日本は勝てないのだろう”と尋ねましたところ、“お前は鍵を幾つ持っているのか、お前の持っている鍵の程度ではとても技術の開発はできない。コーチというのは沢山の鍵を持たなければ駄目だよ。それにはお前経験が足りなすぎるよ”といわれました。“国際経験が足りない、もっと世界を見てこい、ありとあらゆる時に世界に顔を出せ”といわれたのです。ビートは体調が十分ではありませんが、今でもビックマンキャンプでNBAの選手を教えています。また今でも、ビートに年1回必ず日本に来て貰い自分のチームの何処が悪いかを尋ねています。去年は“お前の教える姿勢が悪い、今年は勝てないよ。お前が椅子に座って練習を見ているのを見たのは初めてだ”といわれました。足が痛く、肩が痛くて立ってられないのが去年のオリンピック予選の時から日本リーグにかけての私の体調でした。だから去年私は全く教える資格がなかったのです。ですからアジア選手権がおわったとたんに、“全日本の監督をこれ以上やりません”と記者に自分から発表してしまったのです。後で協会からご注意を受けましたが、結局自分の気持ちはそれどころではなかった、すまなかった、ということなのです。自分はこれ以上できない、これ以上やったら死んでしまうと思いました。去年終わってから

ずっとリハビリを続け、やっとこの頃は肩の痛みもとれ、足の動脈硬化の手術をしてちゃんと歩けるようになりましたので、また今年から頑張らなければいけないと思っております。最後にひとこと、振興会の“振興”とは何かと思い、出かけに辞書を引いてみたところ、“奮い立たせる、奮い立つこと”だと書いてあります。今日皆様にお会いして、ああこの人は昔こうだったな、稲垣先生は昔私に会って“小浜元気か”と大きい声でいつてくれたな、大塚さんには説教もされたな、とか色々思い出すわけです。関口先生には、中川も色々教わったけれども、僕がバスケットを一番教わったのは畑先生と関口先生でした。そういう方々のお顔を拝見しますと、まだまだ奮い立って頂きたいと感じます。これからも私は情熱を持ってバスケットに接していくつもりです。少なくともいすゞの監督は私の飯の種ですし、プロですからまだまだ続けて行きますので宜しくお願いします。

中川文一氏の挨拶（要旨）

今日はお招き頂きましてありがとうございます。諸先輩の皆様の前でお話をするということで緊張しております。私が1990年から去年まで全日本女子を預らせていただいた経緯などについて、かいつまんで話をさせていただきます。

私は開口荘次先生に4年間教育大で教わりました。その内容はコントロールバスケットで、「チャンス捨ててチャンスを生かせ」がモットーでした。25秒ぐらいボールをキープして残りの5秒でシュートにもっていくというバスケットでした。

私が2年生の時、日体大が安部、大石、亘理を擁して大変強かった頃でしたが、私のひとつ上で後に日本鋼管に入社された坂井さんや、私の同期でこれも後に新日鉄に入社した三浦らが中心となって強い日体大を破ったことが特に印象に残っております。残り5分を切って何点勝っていればいける、というコンピューターみたいなバスケットをやることができ、学生の頃は感心しておりました。

そういうバスケット環境の中で、もともと教員志望でしたが、京都の市立高校の教員試験を受け見事に落ちましたので、小森先生に相談に行きましたところ、「お前はバスケットをやるのか教師になりたいのかどっちだ」といわれ、私は「バスケットをやりたい」とお答えしました。「それならばユニチカ宇治のことも考えておきなさい」とのことでした。自分自身は大変硬派だったので、女性を教えるということは考えられず、京都の市立高校（男子）をと考えていました。当時山城高校という大変強いチームがありましたので第二の山城高校を作りたいなという気持ちでした。それがかなわずに、女子を見させて貰うことになって、結局小森先生に5年間バスケットをいろいろ教わりました。関口先生とは反対で、今度は「それいけどんどん」のバスケットだったので大変めんくらいましたが、こういうバスケットもあるのだと知りました。

小森先生というのは、先輩の皆様はよくご存じかと思いますが、パッシングを重視された方でして、勝負するということよりもパスでどれだけバスケットができるか、オフェンスができるか、ということの研究された方だと思います。とにかくドリブルを一つでもつけば青筋たてて怒られて、「そのドリブルはどういう意味だ」と盛んに選手を追究された方で、どちらかといえば勝ち負けよりも内容を重視するという試合運びでした。当時日本リーグは6チームでしたが、ゲームをやるときもコーチングらしいことはいっさいされず、「今までやってきた自分たちのバスケットをやりなさい」ということでした。「自分たちのやってきたこと」とは、ドリブルを使わ

ないバスケットで、それを展開しなさいという意味だと思うのですが、そういう勉強もさせていただきました。5年目になって会社のリストラのはしりの頃でしょうか、当時尾崎さんの率いるユニチカ山崎と宇治と二つが日本リーグに入っておりましてので、宇治の方は私が入社して5年目で解散することになったわけです。

その後静岡のほうに縁がありまして、昭和51年にシャンソン化粧品にお世話になることになりましたが、社長とお話したときに、「中川君これからのバスケットはバレーに追いつけ追い越せだ」ということをいわれまして、社長のスケールの大きさを感じましたし、この社長についていけばバスケットも発展するのではという期待感も覚えまして、お世話になることにしました。私の迎えた転機は、開口先生に教わった4年間と、小森先生に教わった5年間ということでしたが、シャンソンに来てからは、賛否両論あろうかとは思いますが、初めて韓国に遠征して、まったく日本のバスケットと違うバスケットを知ったときで、それが3回目ということになります。当時日本では考えられないことでしたが、ハンズアップしている手が相手の持つボールよりも上にあがっているにもかかわらず、相手は平気でシュートを打ってくる。そこで少しでもオフェンスに近づくと今度はドリブルで破られる、どうして守ったらよいのだろうか悩みました。また、フェイントやスピードの強弱を利用した動きで簡単に振り切られ、すぐにノーマークができてしまいます。これはどういうことになっているのだろうと考えると同時に、「バスケットボールはオフェンスが強いな」ということをその時に意識しました。

それまでの日本の女子バスケットボール界は尾崎さんが制覇してこられました。その後トップになられた中村和雄さんが尾崎さんの後を継がれた方と理解しております。いずれもディフェンスのバスケットボールです。というのは、相手のオフェンスをねじ伏せるだけの足を鍛え、気持ちを鍛えるということとして、当時の決勝戦のスコアは50点前後ではなかったかと思います。今はもう70点台から80点台、ファイナルではそれを越える得点となってきておりますが、私は韓国に行ってバスケットは絶対オフェンスが有利ということを再認識し確信したわけです。日本のバスケットはディフェンスが主でしたが、自分はオフェンスを主として進んでいこうと決めました。それからはオフェンス中心の練習を繰り返し繰り返しやりました。それでも勝てなかったのですが、そこでオフェンスを中心にしながら今度はウェイトトレーニングを取り入れて相手に負けない体力をつけること、つまり相手以上の体力は今の段階では必要ないとして、相手に対抗できる体力を作ろうと考えました。最初は2部だったのですが、2部から1部に入ることはできても、それから連続4年間4位という成績が続きました。3年目から切り替えたのですが、「体力に関してウェイトトレーニングを取り入れながら、しかもオフェンシブなバスケットを追求する」という方向を目指し、それが功を奏して5年目に良い結果が出、6年目で優勝しました。日本の伝統的なディフェンスの流れ、それから韓国から取り入れた伝統的なオフェンシブな世界、そういったものを組みあわせて「全日本」を考えました。日本の伝統であるディフェンスには、いろんなネーミングがあって、尾崎さんの頃は「忍者ディフェンス」でしたが、ディフェンスに変化を加えて力強くしました。自分の場合にはうまいネーミングを付けることはできなかったのですが、一応「はやぶさオフェンス」「パトリオットディフェンス」という呼び名でがんがん走ってショットにいくことに徹し、後はへばりついてディフェンスを頑張っていくという形で戦ってきました。自分がチームを見だした頃は、アジアの中で1位、2位は中国、韓国で、3位争いが日本と台北でした。

ヘッドになる前に3年間中村和雄さんと共にナショナルチームを見させて貰い、東ヨーロッパ

のハンガリーだとかブルガリア、スロバキアなどによく行ったのですが、何故経済大国である日本がこんな小さな国に負けるのかと不思議でなりません。「経済大国はバスケットが弱いな、これからは選手を鍛えていくしかない」と感じ、練習だけでなくいろんな体験をさせることが大切だと思い、毎年のように海外に行ったり、ここにもお世話頂いた方々が沢山おられると思いますが、国内に海外チームを呼んで頂いたりしながら、タフな全日本に、どんなことにも驚かない体質にしていきたいと考えてスタートしました。例えば、ジャッジの問題にしても、当時は国内と違いましたし、トラベリング、ファウル、3秒が鳴らない、いろんな違いがありました。体育館の問題では、日本の体育館は立派にできていますが、ヨーロッパでは何処へ行っても床が悪かったり、リングが曲がっていたりして、しかも平気で国際ゲームをやっているのです。また、夜の9時にゲームがあったりしましたが、そういういろいろなことを体験させ、どんなことにも驚かず、何処の国へ行っても自分たちの力が出せるように、ということを考えまして、ずいぶんと海外遠征によって力をつけられたと思っております。食べるものも決まっていた毎回同じものでも食べなければならないという経験の中でゲームができる状態にするなど、毎年このような繰り返しでした。

アトランタの時に自分の集大成となるのかなと思いました。日本はB組の4位で、A組1位のアメリカと戦って、得失点差が何処の国よりも一番良かったし、100点取られたが90点取ったという印象的な試合でした。その後新聞等でも「違う惑星から来たチーム」といわれましたが、それだけ評価してくれたのかと大変うれしく思いました。村上選手は雑誌の表紙にもなったり、日本のチームの応援に来てくれた方も多く、村上選手の背番号を子供に教えて「しっかり見ておきなさい」といったりして見学していたようです。小さい選手でもこの位できるのだということをアメリカの人にわかって貰ったと思います。試合が終わってからの合同記者会見で、「日本のシュートはなぜダブルハンドなのか」と聞かれたのにはちょっととまどいました。「ダブルハンドのシュートは遅いのではないか、また古いのでは」といわれまして、確かにそうなのですが、「ミニ、中学、高校とダブルハンドでシュートをしてきて実業団に入ってから直すのはなかなか難しいこともあって、そのままやらせている。自分がいったことは“シューティングのパーセンテージ”を見ていただければわかる」と記者団にいいわけがましく回答しました。今、NBAのファイナルが行なわれていますが、シャック・オニールみたいにワンハンドシュートでも入らない人は入りませんよね。

選手村で同じ部屋に女子バレーのスタッフがおりましたが、試合に負けて先に帰国しました。「バレーに追いつけ追い越せ」を自分に言い聞かせてやってきまして、バスケットは決勝ラウンドまで行くのだから、これでバレーよりも上になったと思いましたが、現在はまたバレーにやられています。バレーは今週から世界大会で、テレビでがんがん放映されますが、バスケットは何故そういうことがないのでしょうか。自分が全日本を預かるときに一番思ったことは、テレビ、マスコミを意識することでした。バスケットは地味でテレビに写らず、マスコミもとりあげません。現時点でのバレーは、バスケットの試合とどう違うのかと考えれば、たいして差はないと思うのですが、にもかかわらずあまりとりあげられず残念です。先ほど小浜さんとも話したのですが、WJBLの会長から各チームが良いと思われる企画を出しなさいといわれました。今、韓国のWKBLでは「各社から5億ウォン出しなさい」といわれれば一斉に出します。これまでは1億ウォンでも会社が渋っていたのに、トップに立つ実力者が声をかけると5億ウォンぽんと出します。

WKBLの運営自体はあまり観客が入らず実際は困っていますが、そういう中で簡単にお金を出し、「チームを増やさない」「今年1チーム増えましたが、来年もう1チーム増やさない、そして再来年もう1チーム増やさない、最終目標は8チームで行きましょう」といわれ、着々と進んでいくのです。そういうことが日本には見受けられません。

自分はこれだけやっているのに、何故それを取りあげてくれないのかと思います。実際やっている方々は多くミニから始めてもいますのに、マスコミのとりあげ方が少ないということにはいらだちを覚えます。バスケットもバレーのようになれば選手も頑張るでしょうし、発展していくと思うのです。

日本で自分が10年頑張ってきた中でも、一昨年ドイツの世界選手権に出たときに、予選でアメリカと残り3分まで競って最後は負けましたが、ヨーロッパチャンピオンのリトアニアに勝ってセネガルにも勝ち、第2ラウンドに行つてそこでスペイン、中国、ロシアに負け全敗しました。それでもベスト8に入るチャンスはあったのですが、それまでテレビ放映されていたのが“負けた時点でテレビ放映は切れる、ベスト8に入れば切れる”ということで、外国チームの放映をしていました。負けた僕らも悪いのですが、その後順位決定で9位まで行き、下位では一番良い成績でしたのにテレビ放映は切られて外国のゲームが放映されてしまいました。また、話は飛びますが、リトアニア対スペインの試合の時に、確実にスペインの方が実力的に強かったのですが、リトアニアが勝ったのです。（もし、リトアニアが負けていれば日本はベスト8に入ることができました）予選は地方で行なわれており、最後はベルリンに行つて順位決定戦を戦いましたが、戦っている最中にオリンピックの枠組みがプレスリリースに出てくるわけです。その時は“キューバが8位であればヨーロッパ大陸は4チームから5チームにし、それによってアフリカ大陸は4チームから3チームになる”というのです。アジアとアメリカは1チームずつ、オセアニアは開催国ともう1チームの2チームは変わりなく、ヨーロッパ大陸とアメリカ大陸の1チームの枠についての戦いになっていたのです。このようなことに関しても、ヨーロッパのスタッフの人たちはあらかじめ知っていたのではないかと思います。僕らがベスト8に入れなかったのが大きな原因だと思うのですが、プレスリリースに出たときにJABBAの人は1人もいなかったのです。JABBAとしても国内だけでなくアジア連盟、FIBAに対して一層働きかけをして頂きたいと思います。現実としてオセアニアから開催国のオーストラリアとニュージーランドが出ることになりました。ニュージーランドの試合を見ても高校レベルのチームなので、アジアの2位と対戦させて勝ったほうがシドニーオリンピックに出られるという交渉もFIBAにできたかと思うのですが残念でした。負けてこういう理屈は言えないかもしれませんが、これからのことを思うと大変不安に思うと同時に、これからは外交がもっと必要ではないかと思うつくづく思います。世界の中、アジアの中での日本の弱さを、この10年間に強く感じました。

最後に、過去の静岡ABCの決勝（対 韓国戦）では、日本のチームのリズムとテンポを狂わされて負けました。あまりにも世界に目を向けすぎて、アジアをちょっと軽視したということについての反省もありますが、韓国、中国、台湾、北朝鮮に対しての的確な戦い方をもっと研究する必要があると考えております。アジアで勝たなければ世界に行けませんので、まずアジアを制圧することなのですが、その意味では特に昨年のABCにおける痛恨の敗退を幾重にも反省しております。

これからはチャンソンのチームの方で頑張りますのでよろしくお願いいたします。

ーキリンカップバスケットー

ヤングメン日中国際親善試合観戦記



寺田 生男

『キリンカップバスケットボール2000』の開幕戦「ヤングメン日本代表対ヤングメン中国代表」の試合は、7月27日秋田市立体育館で開催され、93-80で日本が初戦を飾った。超満員の3900名の人達は次代を担う選手達のプレーを堪能した。

「田臥ら活躍、中国を圧倒」

ーヤングメン日本代表、速さで高さを封じるー

日本93 $\left(\begin{array}{c} 48-40 \\ 45-40 \end{array} \right)$ 80中国

と秋田さきがけ新報に大きく掲載された。

公式戦1年ぶりという田臥勇太（能代工高・BYOH1年）が、立ち上がりいきなりノールックパスを左サイドの菊地勇樹（能代工高・専修大2年）に通すと、菊地が角度のない位置から得意の3ポイントシュートを決めた。直後には走り込みながらのバックパスを同じガードの柏倉秀徳（仙台高・筑波大2年）に通して速攻をアシスト。先発5人の平均身長が195cmもある中国チームが反応できない程のシャープさで会場を沸かせた。特に、能代工高9冠時代のコンビ、田臥から菊地にわたっての3ポイントシュートが序盤だけで3本決まって、先制ダッシュの原動力となり、48-40で前半を折り返した。中国は後半6分過ぎから身長2m台のセンター陣が機能し始め、じりじりと点差を縮め、73-72と逆転してきた。9分、コートに戻った田臥は逆転された直後に自らシュートを決め、流れを引き戻すと、リバウンドからのボールを素早いパスでセンター山田大洛（大阪高・日大1年）に回して得点を重ね、中国の流れを断ち、追撃を振り切った。

おなじみの連係プレーを披露すべく能代工9冠トリオ（田臥・菊地・若月）をコートに繰出し、短い時間だったがファンサービスを配慮してくれた清水ヘッドコーチ。観衆は大満足だった。

司令塔田臥勇太の早い冴えたパスから、センター陣を走らせ、速攻を繰り出すというパターンで戦わざるを得ないチームでもある。新潟の2戦目、東京の3戦目はゴール下での中国の高さ、当りの強さに押し切られるようであるが、センター李榛梁の得点力、ガード胡雪峰のアシスト、リバウンドなどはすばらしかった。ヤングメン日本代表にも楽しめる選手が一杯いるので今後を期待したい。

「全員が走れるバスケット」「ファンを楽しませるバスケット」「夢と希望・感動を与えてくれるバスケット」を目指し、シドニー五輪は残念ながら男女とも出場を逸したが、次のアテネには絶対参加できるよう奮起して貰いたい。

日本はアジアでは常にトップでなければいけないし、2位、3位での参加は無意味である。全てを反省し、協会、選手、観衆が一丸となつての前進あるのみ。アトランタ五輪に出かけた4年前の、あのカナダ戦の感動をもう一度味わってみたい。

（秋田県バスケットボール協会常任顧問）



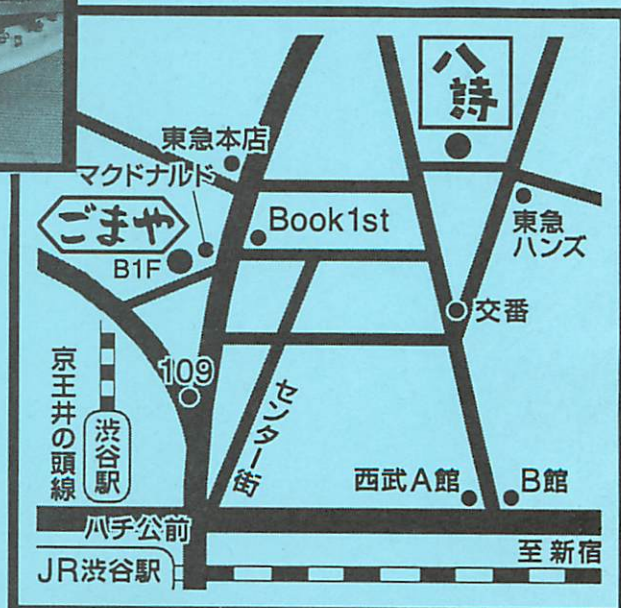
ビストロ 八詩

うはら

ごまや <85席>
OPEN 17:00~24:00 (Last order 23:00)
東京都渋谷区道玄坂2-25-13
松原ビルB1F
TEL 03-3770-8158

八詩 <70席(2F・50席貸切OK)>
OPEN 17:00~24:00 (Last order 23:00)
東京都渋谷区宇田川町38-3
TEL 03-3496-8009

【オフィス】JACKPOT PLANNING ジャックポットプランニング
〒155-0031 東京都世田谷区北沢2-16-2 Aフラット1F
TEL 03-3413-9555 / FAX 03-3412-7332



DUPER[®]



WE ARE A SPECIALIST IN BASKETBALL GOODS.

DUPER FIVE CO., LTD.

3-5, TATEKAWA 3-CHOME, SUMIDA-KU, TOKYO 130-0023 JAPAN
TEL. TOKYO 03(3632)7045 FAX. TOKYO 03(3632)8327

●2000-2001デューパーNEWカタログをご希望の方は、住所、氏名、年齢、TEL、職業を記入し、切手390円を同封の上、上記住所までお申し込み下さい。